

『天然ゴムの歴史 ヘベア樹の世界一周オデッセイから「交通化社会」へ』
こうじや信三著／京都大学学術出版会

現代社会は合成高分子の存在無しには成り立たない。多くの合成高分子が天然素材の代替品として開発され、場合によっては天然物をはるかに凌駕する性能を示すものもある。そのような中であって、天然ゴムは農産物でありながら未だ合成品（合成ゴム）では発現できない性能を有している。もっとも身近なところでは航空機やバス・トラック用など負荷の大きな用途に用いられるタイヤには天然ゴムが不可欠である。本書の中でも述べられているが、東南アジアで大規模プランテーションにより生産されている天然ゴムは、農産物であるが故に運が悪ければ病害により壊滅する可能性がある。冷害による不作で食糧危機が誘発される、というのはイメージしやすいかも知れないが、仮に天然ゴムが病害で生産されなくなったとしたら、現在社会では物流が大きな影響を受けて生活が成り立たなくなることも自覚しておいた方がよい。

ところで、南米アマゾンの熱帯雨林に自生していた天然ゴムが、いかにして地球を半周廻った東南アジアで生産されるようになったかをご存じだろうか。本書ではいかにしてアマゾンから天然ゴムの種子が持ち出され、それが全く別の地で栽培されたか（plant introduction）が描かれている。それもただ単に歴史的な事実を述べるのではなく、膨大な資料を元に筆者が行った調査に基づき、アマゾンから世紀をまたいでゴムが地球を巡る様を、それにかかわった人物の生業と共に描いている。本書に登場する人物の中で特に重要なのが2人のヘンリー（ヘンリー・ウィッカム と ヘンリー・フォード）である。前者はアマゾンから苦労の末天然ゴムの種子を持ち出して東南アジアで商業栽培するまでにした人物、後者は言うまでもなく米国フォード社のリーダーとして現代社会をモータリゼーションの時代へと導いた人物である。本書の副題は「ヘベア樹の世界一周オデッセイから『交通化社会』へ」となっているが、実際には世界一周（南米-欧州-アジア-南米）はなされていない。この理由についても本書に詳しく述べられている。

現代社会において、動植物の国際間の移動は検疫の観点から厳しい制限がある。天然ゴムのプラントイントロダクションはそんなものが無い時代の話であるが、一つ間違えば天然ゴムに頼っている生活がいかに危ういものであるかを考えさせてくれる一冊であると思う。

執筆者紹介

竹中 克彦

物質材料工学専攻教授。専門領域は、高分子合成。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『天然ゴムの歴史：ヘベア樹の世界一周オデッセイから「交通化社会」へ』 こうじや信三著 京都大学学術出版会 2013年 2,376円

[ブックガイド目次へ](#)